

児童精神科医 門眞一郎さんに聞く / 不登校新聞

ノートブック… 自著

作成日: 2019/03/12 12:13

更新日: 2020/01/27 10:05

URL: <https://futoko.publishers.fm/article/3140/?fbclid=IwAR2oSff4YdINjxzewZfeba...>

[トップ](#) □ [279号 \(2009.12.1\)](#) □ [識者の指摘](#)

児童精神科医 門眞一郎さんに聞く

□ □ 小 中 大 □ □ 0 いいね!

[nakajima_](#)

2014年01月15日 15:02 by



今回、お話をうかがったのは児童精神科医の門眞一郎さん。門さんには児童精神科になった経緯について、不登校への考えについて、総会会長を務めた第50回日本児童青年精神医学会について、うかがった。

——いつごろから医者を目指されたのでしょうか？

父親が内科医で開業医をしていたんです。私の家は広島市内といっても端っこの田舎町で、そういう町の開業医の長男ですからね。当然、まわりからは「跡を継ぐものだ」と言われて育ってきました。もちろん、悪い職業ではないので、いずれはという気持ちはずっとありました。

ただ、父親は一度も、「跡を継げ」なんて言わなかったですね。父親は変わった人で、当時ではめずらしく、PTA会長や町内会長、それにスポーツ少年団の団長までしていました。というのも「治療より予防」という意識が強かったようです。よくNHK

教育の健康番組を録画して、診療が終わってからガリ版でテキストをつくって、日曜日に近所の人を集めて勉強会を開いていました。

そういうことをずっと続けていたんです。開業医としては一銭もお金になりませんが、「本当に健康を考えたら、どう予防するかだ」とよく聞かされていたので、それはいまでも影響を受けています。

——なぜ医者の中かでも児童精神科医になろうと？

精神科ってのは教科書が薄いんですよ（笑）。

内科の教科書なんて、ごつい教科書が上・中・下とそろってる（笑）。

まあ、それは冗談ですが、高校のときから哲学に興味があったんです。たいしてわかりもしないのに、哲学の本をかじってエエカッコしてました（笑）。それに当時は、実存哲学・実存主義の本がよく出ていたり、京都大学の哲学科に伝統があったり、そういう時代でもありました。

医者の勉強はあとでやればいい

私は医学部に入りましたが、父親から言われたのは「医者の勉強は卒業したらやればいい、大学では哲学と文学をやれ」って。それを真に受けて、本ばかりかじってたら、追試、追試のくり返しでしたけど（笑）。

やっぱり哲学が一番近い医学が精神医学です。私も内科か精神科か最後まで悩みましたが、最後の最後、各科からの募集要項を見て、精神科に決めました。精神科の募集要項には、精神科に入ったら、精神科評議会に属さないといけない、と。その精神科評議会には、「反教授会」「一人一票制」「ストライキも辞さない」などといった5つの原則がありました。「すごい民主的やな」って思ったのが一番のきっかけでした。

——お子さんも不登校されていますが、不登校について、どうお考えですか？

1980年代後半から不登校の子の相談を多く受けました。私も最初はなんとか学校に行ってもらおうとして、朝、家庭訪問をしたこともあります。もちろん、ダメでした。

当時、不登校に対する精神科医の態度は左右両極端でした。渡辺位氏のように「社会が病んでいる」と言った人もいれば、稲村博氏のように「不登校は病気だ」として、入院・投薬を勧めた人もいます。私が「なぜ不登校は増えていくんだらう」と考えたとき、社会、個人、どちらかのみ原因を見いだす考えは、しっくりきませんでした。どちらの側面もある。ならば行き着くところは「疲れ」としか考えられないわけです。

「疲れ」だけでは、病気にはならないですが、疲れが高じれば病気になります。そして、疲れていることは病気ではありませんが、元気な状態でもありません。たまたまその学校に所属して、毎日、通い続けることに「不利な条件」がある人は、疲れていく。そういうことだと思います。

疲れているとき、大事なのは栄養と休養。それも「疲れている」ことを理由に休まないといふと疲れがとれません。仮病だと疲れは完全にとれません。だから、私は年間20日間程度の年次休暇制度を90年ごろから訴えています。それがあつてだいたいぶらくなるだらう、と。



学校は手段 目的は学び

それと大事なのが栄養。この場合の栄養は、情報です。学校に行かなくなると、この先、どうなるかさっぱりわからないから、将来が真っ暗に見えてくる。親だって、心配でたまらない。だから、本人も親も必死に学校に行こうとして、また疲れる。でも、学校は手段なのであって、目的ではありません。目的が学ぶことであれば、ほかの手段だってあります。高校卒業程度認定試験などの手段もあります。でも、日本ではほかの手段があまりに少ないことも事実です。それでも、いち早く情報を伝えて「不登校だから人生が終わるわけじゃない」と思ってもらいたいと思っています。

——診察を続けてこられて時代の変化を感じることはありますか？

やはり発達障害が絡んでいる例が多くなったことでしょうか。本当に多くなったと言えるのかはわかりません。いままで見逃していただけかもしれませんから。

しかし、発達障害・自閉症スペクトラムの概念が出てきたことで、必要な支援が開始できるという利点は大きく、たんなるレッテル貼りにはなりません。発達障害に関して言えば、一番多いケースが、発達障害が理解されず、たんなるわがままでと非難され、いじめられることでしょうか。そのことで不登校につながっていく。発達障害は情緒障害ではない、という点は本当に理解されづらいことです。

——教育・福祉・医療の連携を訴えておられますが、お仕事ではどんなふうに？

京都市児童福祉センターに、私は医者として務めています。センターには医療機関も児童相談所も併設されています。そして、学校とも連携しています。ここの仕事は、教育、福祉、医療がどう連携していくかにかかっています。

発達障害のケースだと、一階の児童相談所から診察依頼が来ます。児童相談所の段階で、ケースワーカーが付き、家庭・学校訪問などで生育歴や家庭事情といった状況を把握します。その直後、心理判定員が子どもの心理検査をします。これらの情報がそろった時点で診察し、診察結果と必要な支援について、保護者と先生に同時に伝えます。こ

という連携して、診察室のなかだけ、学校、家庭のなかだけにかぎった支援には、しないことが大事な点です。

——第50回児童青年精神医学会総会は芯が通った大会で意義深かったです。

40年前の第10回総会の際、学会改革委員会（小澤勲委員長）が学会改革をしました。製薬会社との関係を絶ち、ディスカッションを中心とする。その流れは、その後もしばらくは続きました。しかし、これは児童青年精神医学会だけでなく、ほかの医学会も、製薬会社の援助なしでは大会自体が開けないような、いわば贅沢な大会になっていきました。一番典型的なのは製薬会社主催のランチョン・セミナー（昼食会を兼ねる講演会）です。

児童青年精神医学会でも4、5年前からランチョン・セミナーが始まりました。最初の年、食事は有料でしたが、翌年以降は無料の食事が配られています。出席率もいい。私は、けったくそ悪くて、タダ飯なんか断ってましたが、とても不愉快なものです。

癒着を断って 参加者増加

数年前、総会の実務的な運営を担う総会会長の依頼があったとき、最初は断りました。その後、引き受けざるを得ない状況になったのですが、その代わりに40年前と同じく製薬会社との癒着を断ち切りました。参加費を値上げしてでも、内容のある大会にしていこう、と思ったわけです。

結果、1100人の参加で採算がとれる大会に1700人が参加してくれました。みなさんが意を汲んでくださったことが、本当にうれしかったです。

——今後、力をいれていきたい点は？

第50回大会は終わったので、学会からはひとまず身を引きたいと思います。いま一番力を入れたいのは自閉症の人にコミュニケーション手段を伝えることです。自閉症の人は自分からコミュニケーションをとるのが難しいんです。でも、その手段さえ獲得すれば、意思を伝えてくれる。伝えることで、われわれから見た問題行動、パニックや自傷や攻撃的行動はずいぶん減ります。私が力を入れているのがPECS（絵カード交換式コミュニケーション・システム）。自分の意思を伝える手段を教えるシステムです。私もこのPECSを聞いたときはコロンブスの卵だな、と思いました。

こういう手段が、日本の自閉症の人には与えられてこなかった。重度の知的障害の人や何十年も施設に入所している人のなかには、強度行動障害と言われる人もいます。しかし、それはコミュニケーション手段を持たなかったためだとも言えます。

だから、なんとか、その手段を伝えていきたいと思っています。

——ありがとうございました。（聞き手・奥地圭子）

（かど・しんいちろう）1948年広島市生まれ、被爆二世。児童精神科医。1973年京都大学医学部卒業後、公立豊岡病院精神科に勤務。1981年より京都市 児童福祉センター副院長（05年から京都市発達障害者支援センター“かがやき”のセンター長兼務）。著書・訳書に『家庭と地域でできる自閉症とアスペルガー 症候群の子どもへの視覚的支援』『写真で教えるソーシャル・スキル・アルバム』（ともに明石書店）

◀ 前の記事

次の記事: 【公開】フリフェス'09 不登校
ボクらから夢メッセージ

▶

関連記事



本物の学びを子どもが手にするために【居場所スタッフ
の仕事】

197号 (2006.7.1)



18年間にわたり娘を監禁 福岡市監禁事件を考える

197号 (2006.7.1)

関連キーワード



インタビュー

門眞一郎

精神科医

読者コメント

フリースクールスタッフの仕事とは【三重県津市】

1  (2006.7.15)

□ 公開範囲と
は

コメントはまだありません。記者に感想や質問を送ってみましょう。